

# 短歌を読んでしみじみしたい

斉藤 梢

児童文学雑誌『赤い鳥』が創刊されたのは一九一八年。北原白秋は、十月号に「赤い鳥小鳥」を発表している。

赤い鳥、小鳥、

なぜなぜ赤い。

赤い実をたべた。

白秋が〈私の童謡の本源となるべきものである〉と言う「赤い鳥小鳥」を『トンボの眼玉』をひらいて読んでみると、言葉が音を導いていることに、あらためて驚く。文字を目で認識しながらも、心の中には音が次々と生まれてくるのだ。子供の頃に親しんだ童謡の多くは、耳で聞いて覚えて、声に出して歌った。「ほんとうの童謡は何よりわかりやすい子供の言葉で、子供の心を歌うと同時に、大人にとつても意味の深いものでなければなりません」という「はしがき」に、白秋の童謡へのこだわりが見える。そして、「わかりやすい言葉」「意味の深い」という両方を満たすことは、歌を詠むことにおいても難しいことではないかと気づく。〈しらべ〉のよい歌は、一度読むだけで覚ええられるし、心に響く。

『トンボの眼玉』刊行から百年。白秋が童謡に残した言葉のひびきは、今もなお人々の郷愁を誘っている。

白鳥は哀しからずや空の青海のあをにも

染まずただよふ

若山牧水

「現代短歌」二〇一八年十月号の特集「牧水考」を読むと、日高堯子が「若山牧水の歌との最初の出会いは歌唱であった」と書いている。そして、栗木京子は「純情の所産」若山牧水の短歌九〇首選を終えて〜」において「牧水の歌は説明や報告に傾くことがない。それは、内容の伝達だけに言葉を奉仕させるのではなく、しらべのうるわしさが歌の根幹を支えているからであろう」と牧水の歌の特質を捉えている。

福島市出身の古閑裕が、牧水の歌に曲をつけた「白鳥の歌」のレコードの発売が一九四七年であるから、日高のように、まず耳で聞いて牧水の歌になじんだ人も多いだろう。「短歌研究」二〇一六年十二月号の特集「愛誦される歌―秀歌一〇〇〇首へ向けて」での歌人アンケートの一位は、牧水の「白鳥は」

の一首であった。牧水が見つめた「白鳥」が、読者の心の奥で息づく時、その「白鳥」の孤独と読者の孤独が共鳴する。歌の言葉のみを解釈するということからしばらく離れて、歌を自由に鑑賞してみるという時間があってもいい。〈しらべ〉に導かれた言葉を享受し、その言葉が心に浸透してゆくといい体験は、とても大切な。

をさなごに鼻つままれて「んが」と言ふ

「んが」「んが」古いオルガンわれは

小島ゆかり

第十四歌集『六六魚』の中の、この一首を讀んでから、この「んが」が私の心に棲みついている。思いがけない時に「んが」と声に出してしまうので、困る。「んが」という音に反応して喜ぶ孫に鼻をつままれて、「んが」と言う作者。とても原始的な音の「んが」が、歌の中で繰り返えされることによって、言葉は声として伝えられ、声に出して読むことによつて、この「んが」は読者の声にもなる。目で読みながら、「古いオルガン」の音を想像し、人間の声の温度を感じ、過ぎ去った時間と未来を思うこともできるのだ。

一読してわかりやすく、〈しらべ〉もよく、声を伴うと味わいがあり、長く見つめてしみじみできる、そういう歌を私は読みたい。